

6. 学生を受け入れている地域団体からの報告

柏原まちづくり協議会 会長 渡辺 修

柏原まちづくり協議会は平成13年に行政と地元の住民の方と一緒に立ち上げようということで発足し、それと同時にTMOのまちづくり柏原が設立されました。その2本立てで、株式会社まちづくり柏原は空き店舗をいかに有効に利用して新しい店舗を引っ張ってくるかということで、この会場にいらっしゃる荻野さんが社長さんとして馬車馬のようにブルドーザーのように走っておられます。私の方はソフト面と言いますか、柏原の町中がお客さんが来られてもほっとしたまち、きれいなまち、明るいまち、住んで良かったなど、そういったまちを作っていこうという観点からスタートしております。それで私どもが手掛けたのは先ほどお話ししておりましたけど、道路のカラー舗装化、それから修景事業として、昔からある建物の外観を町並みに合うような外観に整備していただく取組を行っています。これらについては中心市街地活性化法とか色々な国、県、市からの補助金を頂きまして、改修したいというお客さんと一緒にデザインを考えています。それともう1つは、協議会が発足した当初から柏原町全部を花のまちにしようと思い、当初はコンテナガーデンということで植木鉢のOPMを作ってそれを希望者の玄関先、お店の前とかに置いていきました。その後色々な計画の中で、ケヤキ公園、オオテ公園を整備し、2、3年前からは国道との交差点に白バラ黄バラ約70本、去年駅裏の南側の方で280本、今度また2月に県の助成を受け、自治会館の駐車場のところに約80本ほど植える予定です。これらについては全てまちづくり協議会で管理を行っており、自治協議会と共同して柏原町をバラの街として、「柏原に来たらバラ公園があるよ」、また「駅前にベンチもある癒やし系の公園もあるよ」と思っていたけるようにこれからも取り組んでいきたいなと思っております。それともう一つですが、柏原町でユニバーサルデザイン、その指定を受けていますが、これからは子供から高齢者までのみなさんがほっとするような街、不便がなく非常に住みよいまちになったなど、そういった方向性にしていかないとこれから高齢化社会になるとなかなか生活がしにくくなると、少し心配しております。そこで学生さんたちにはユニバーサルデザインについて一度真剣に研究していただけたらなと思います。ユニバーサルデザインという言葉自体がまだ目新しいもので、先生のご指導のもとに、指導していただけたらなと思っております。これで終わらせていただきたいと思っております。どうもありがとうございました。

7. ゲストによる講話

(1) イオンモール株式会社 松田 卓也

皆さんこんにちは。イオンモール株式会社の松田と申します。なぜこの会社の人がここにいるのかと疑問を持たれる方も多いと思いますが、この会社に勤めながらこの場に来るのも大変だということを少しでもご理解いただくと助かります。まず私の方で簡単に自己紹介をさせていただきます。出身は愛知の名古屋です。先ほど清水先生からもご紹介いただきましたように、今年の3月まで関西学院大学大学院の総合政策研究科に在籍しておりました。4月からイオンモール株式会社に入社し、現在茨城県のつくば市で仕事をさせていただいております。今日はこの15分のために5時間半かけて来ましたので、できれば話を聞いていただくと嬉しいです。私の方からは、柏原のまちづくりプロジェクトが発表されたものと活動内容が重複する部分は割愛して説明させていただきます。柏原まちづくりプロジェクトの私たちの代の時には皆さんと一緒に大学の研究室で、どういった活動をしたら地域のためになるかなということだったり、空き家で地域の方の意見を聞いたり、自分たちの活動を発表させていただきました。これが発表のなかでもあったアートクラフトフェスティバルというもので、地域のイベントに、自分たちのイベントだけではなくて、自分たちのことを知ってもらうために地域のイベントにも参加し、去年のものになりますけれども自分たちの活動報告書を皆さまに知ってもらうために持参しました。

私は今日皆様に3つお話をできればと考えています。スライドに「アドバイス」と書いて①②③と出ていますので、この3つだけメモしていただけるとすごく嬉しく思いますのでよろしくお願いします。

1つ目に「他流試合を行うこと」。これはどういうことかと申しますと、まさに今日この場のようなことです。今皆さん自分の大学、同じ研究室だったりそれ以外の研究室の人だったり、他大学の人と初めて出会うこともあると思います。私も学生の頃似たようなことをしていました。このシンポジウムに出させてもらったこともあります。これはつながり交流祭、阪神間の地域で同じようにまちづくりをしている学生の発表をしたり、この後のディスカッションを行うようなことをしました。私はこのシンポジウムに参加してすごく良かったなと思うことがありました。今この場にいるメンバーというのは比較的多自然地域、言い方変えると田舎で活動しているメンバーですから、そこでの共通の意識があり、人口が減っている、商店街が寂れているというのが共通の意識で、それに対して共通項を見出すことも面白いし、ここでは比較的阪神沿線であったり岡本であったり、ここよりも人が多いところで活動しているまちづくりのメンバーの活動報告がありました。同じ目的を持っているけれども、こういう今日皆さんが見つけてもらったものが違っていたんです。同じことをやっているけれども違った方向で、「比較的地方の郊外都市から見ると柏原というのはこういうふうに見えるんだな」、逆に「柏原から見るとうらやましいな」という点をお互いディスカッションできて、すごく発見がありました。もう一つ、このフォーラムは私が携わって3回目なのですが、この後発表してくれる長井君ともこの時に出会ったりしていて、人脈を作ったりとか、活動報告、ノウハウの共有であったり、私は今日の発表を聞いていて、もしかしたらどこかどこか一緒に出来るのではというのもありましたので、このように同じフィールドで活動している仲間との交流を深めてもらえればなと思います。もう一つ、これは去年のフォーラムのものです。今日はまち歩きという形でしたけれども、去年はフィールドをバスで訪れて、実際にどういう活動をしているのかというのを畑や田んぼに行ったりして、自分たちの活動場所、柏原ですとこの先のスタジオを降りて実際に見てもらったりしました。これで大分仲良くなったりもしました。これは東京の一橋大学であったシンポジウムです。今ここにいるのは関西の大学のメンバーが多いと思います。けれども、まちづくりをやっている学生は別にこの丹波だけではありません。色々な地域、日本の中で地方都市とか人口減少とかが進んでいるのは決して丹波だけではなくて、他の地域でも進んでいます。東京大学であったり千葉大学、大阪大学からも一緒に来たりとか、武蔵野美術大学だったり芸術系の大学生であったりとか、一橋の経済系の人、みんな学んでいることだったりとかアプローチは違うけれども、共通意識は持っているの

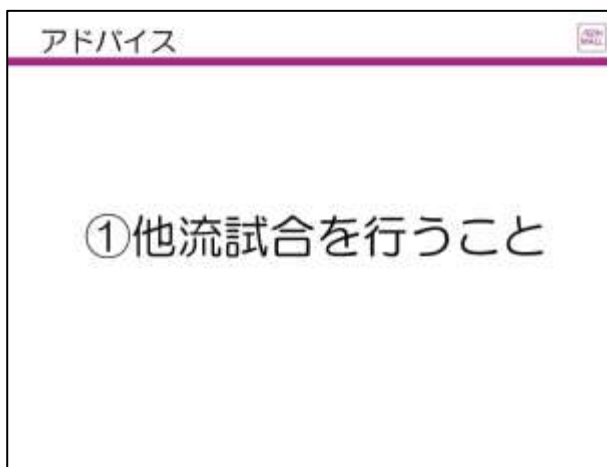
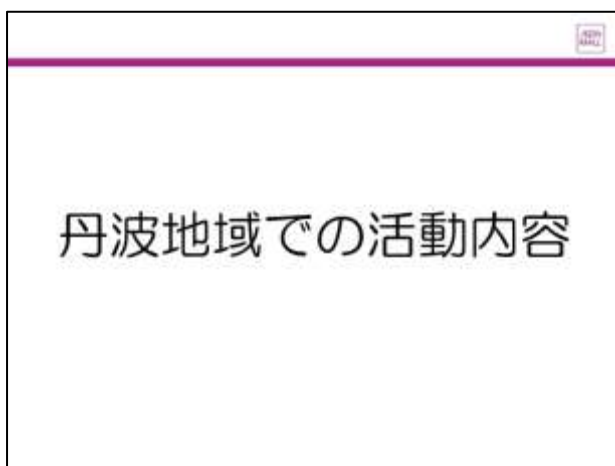
す。地域を良くしたいとか。私もその場で話させていただいて、同じなんだなと感じました。活動内容は違うけれど、私も今社会人をやっていますけれど、ここのメンバーもみんな全然違って、商社に行ったりとかNPO行ったりとか行政に行ったりとか違うけれどたまに会うんですね。みんな全然仕事の内容が違うけれど、ただ昔はこうだったよねと話をしたりします。自分が単純に仕事がつらいなと思ったときに、こういう昔の仲間と出会うともの凄く元気を得たりするんですね。だから私が皆さんに言いたいのは、先ほど話されたお祭りを年1回同窓会とするのもすごく大事だと思いますし、原点に帰れるきっかけになったりするので、こういうところでどんどん人脈を作ってもらえればと思います。そして、発表の場は、決して学生同士の間だけではなくて、これはたまたま篠山市さんからお声をかけていただいて、私は学生でしたけれど、地域の住民の方だったり全然自分とは立場が違う方がいるところで自分たちの活動を発表すると、自分たちは学生だからこういうことができるんだなと、好きなことができるんだなと思いました。全然自分が考えていることは甘いんだなということが良く分かりましたが、自分たちしかできないこともたくさんあるんだなということもたくさん感じたりしたので、是非こういう機会があればどんどんトライして自分のことを発表して、走り切るのは今だと思うので、どんどんトライしていただければと思います。

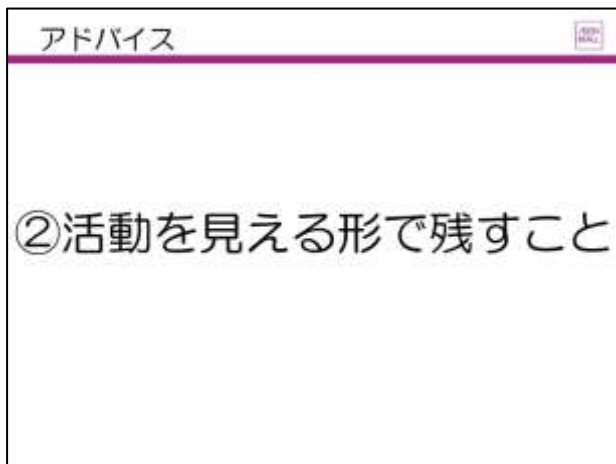
2つ目に「活動を見える形で残すこと」。今日これできている団体はすごく多いなと思いました。映像を作成している団体、地図を作成している団体があります。私たちのときも少しやりました。今日少し持ってきたんですけど、今日皆さんのパワーポイントを簡単に印刷するだけでいいと思います。印刷して、表紙をつけて、これが私が書いた1年目のときで、これが2年目、そしてこれが先ほどの一橋大学のメンバーたちと共に作ったものです。なぜこれを残すべきかという、誰かに「私まちづくりやりました。」と言っても正直何も伝わらないです。たぶん私が思っているまちづくりと皆さんが一人一人思っているまちづくりって全然一緒じゃないと思います。今言ったイベントをやることもまちづくりだし、映像を作ることもまちづくりだし、すごく抽象的だからこそ相手にしっかり伝えるということを意識しないと、せっかく皆さんが活動したのに誰も評価してくれないというのはモチベーションがなかなか続かないです。プラスαで、3年生とか2年生はこれから就職活動で、「学生時代何をやっていましたか？」と言われたときに、「まちづくり活動をしていました。」と言うと「ああそうですか。まちづくり活動ってどんなんですか？」って、「地域の人と話しました。」「ああそうですか。」で終わってしまいます。けれども、しっかりこのように目に見えるもので形に残すこと、とりわけ映像化はすばらしいと思います。そういうので相手に伝えるということを意識していかないと、せっかく活動したのに地域の方に伝わらなければ意味がないと思うので、これを重視していただければと思います。

最後3点目として、「継続的にまちづくりを続けるために」。これは私が大学の頃に活動していた時に先輩から言われて今でも良く覚えていることです。「できること」、「したいこと」、「求められていること」。この3つを今日誰か提案してくれました。「こういうイベントをやりたい」、「こういう地域の課題を見つけてツリーを作りたい」、「歩行者空間化をどうにかしたい」、「お祭りを継続させたい」といった色々な提案が出てきたと思います。でも、その提案が出てきたときにこれを考えて欲しいと思います。「できること」と「したいこと」。これはただ単に自分が言いたいことだけなのです。ここが抜けていると、果たしてそれが地域のためになっているのかという視点が抜けてしまいます。ただ単に自分がしたいことをたまたまこういう環境があるからやっているに過ぎなくて、自己満足になっています。もう一つ、「できること」と「求められていること」。私これできます。地域の人もやってくださいと言っています。けれども、それって続けることが厳しくないですか。したいというものが無いから。自分がやりたいというモチベーションがないのです。だから大きいことを言って、私これやります。地域の人にヒアリング聞いたら、こういうのが欠けているので私やりますと。確かにできるかもしれないです。だけど継続的に、今言った引き継ぎ、代が替わってもできているのかと言うと、それは難しいと思います。「したいこと」と「求められていること」。これは無謀に近いかなと思います。例えば、私が地域に公園がないので公園を作りたい。地域の住民の人も言っていました。でも学生にはゼロから公園を作るというのは難しいですね。他にも色々なことがあると思います。今皆さんが色々提案を、地域の課題を見付けたりとか諸々したときに、この3つですね。これってまず「自分たちにできるのか?」、プラス「本当にしたいのか?」「単に誰かか

ら言われたから、先生から言われたからではないのか?」。2つ重なっても、それって本当に地域のためになっているのか。この3つのバランスが大変難しいと思います。重なっている部分も本当に小さいと思います。けども、本当に有意義なまちづくりであったり自分たちのためにもなって、地域の方のためになるのというのはかなり限られていると思います。だからこそ、それを何か提案ができたときにこの3つに当てはめてもらえれば、何かそれをしたときに必ず大きな成果であるとか、地域の方に喜んでもらえて、自分たちが成長できるまちづくりの活動ができるのではと思います。私大きなことを言っていますけれども、学生時代はあまりできませんでした。だからこそ皆さんに伝えて、皆さんにはうまくやっていって欲しいという思いがあるので今日発表させていただきました。

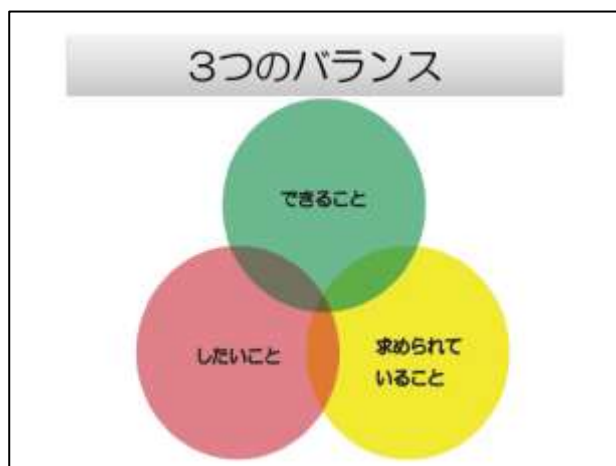
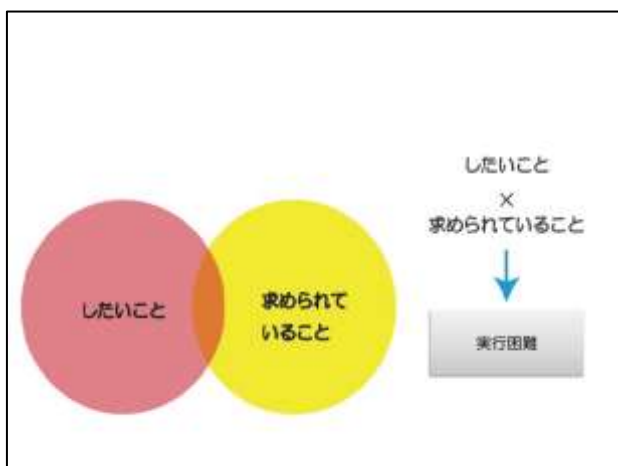
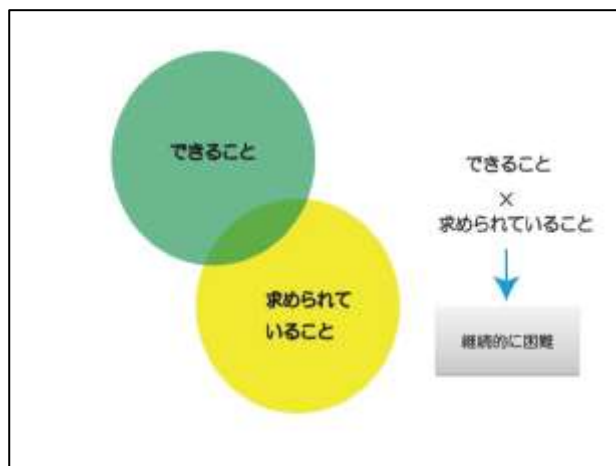
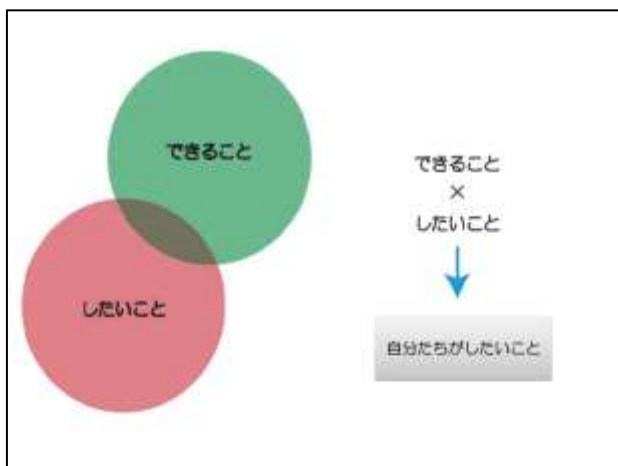
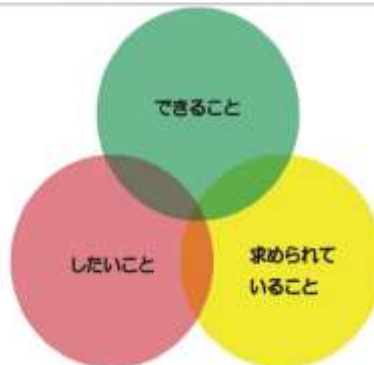
簡単にこれで発表を終わるのですけれども、最後に少しだけアドバイスするとしたら、私がなぜこの会社に就職したか。おそらく皆さんが思うに私の会社はあまり良いように思われていないと思います。私も実際そういう意識でした。けれども、それでいいのかなど。ずっと思うことがありまして、郊外に大きなショッピングセンターができたことにより中心市街地が寂れたということは確かに原因があるかなと思います。けれども、それだけではないと思います。やはり中心市街地自体に元気がなかったと。いつまでも郊外のショッピングセンターに対して矛先を向けていてもあまり変わらないのではないかと。私がこの会社に入った大きな理由としては、やはり私はまちが好きだし大変丹波の人にもお世話になったし、何かしらの形で還元したいと思っているんです。ここの会社に入ってノウハウであったりとかを色々吸収して、私は中心市街地とショッピングセンターは共生できるかなと思っています。その思いがあって、やはり地域の方と色々話して、現在の会社にながらこそ、お互いにまちを良くしていこうという思いがあって、現在の会社を志望して入社させていただきました。おそらく皆さんが就活でぶち当たるのは、まちづくりをしているけれども、実際それを仕事にできるのはものすごく難しいと思います。どこかで自分の中で妥協であったりだとか仕事っていうところでぶち当たると思うのですが、けども自分が満足していればいいかなと思うところもありますし、今日私がここにいるのはそういう悩みを聞くためでもあるかなと思うので、私はこの後もブラブラしていますし、懇親会も参加させていただきますので、もし何かあれば私で答えられることであれば声とかもかけますので、またよろしくお願いします。少し長くなりましたけど、ご静聴ありがとうございました。





③ 継続的にまちづくりをつづけるために

3つのバランス





ご清聴ありがとうございました



イオンモール株式会社

(2) 神戸大学大学院人間発達環境学研究科 長井 拓馬

よろしくお願いします。2ヶ月ほど前に私もお電話を頂きまして、ゲストとして話をしてくれないかと言われたのですが、私も2年ぐらい前まで篠山市で地域作り活動というものを行ってきました。その結果、縁があり今現在学生をやりながら篠山市の地域おこし協力隊というところで働かせていただきます。私が篠山で行ってきた活動と今行っている活動で、その過程で何を思って活動してきたのかというところを今日はまとめさせてもらいました。先ほどの発表のように私はしっかりと自分の考えをまとめきれてないところがあります。その理由はまだ私も地域で動きながら、悩みながら活動しているところがあるので、私が話したことを聞いてまた皆さんが何か思うところがあって、私も皆さんが話していることから何かを学んで次の活動に活かしていけたらなというように思っていますのでよろしくお願いします。丹波地域での活動として、私は「ユース六篠」というサークルで活動していましたのでその活動の紹介と、今取り組んでいる地域おこし協力隊の紹介をしたいと思います。あと、少し難しかったのですが、地域と学生の課題、学生へのアドバイスを話していきたいと思います。

自己紹介ですけれども、まず今神戸大学の人間発達科学研究科の生物多様性研究室に所属しています。昔の教育学部だったところで、色々な研究室があるのですが、その中の生物系のところにいます。例えば花と虫の関係だったりとか、なぜそれが増えたり減ったりするのかということ私の研究対象としています。篠山との関わりとしては、私は神戸大学の農学部出身です。なぜ農学部を選んだかということ、農業がしくて、関わってたくて仕方なかったからというぐらいの農業好きで、2010年度の篠山を訪れる授業、農業農村フィールド演習を経てサークルを立ち上げて、今地域おこし協力隊で活動しています。「ユース六篠」は、先ほど農村農業フィールド演習を履修した人たちが母体となって立ち上げたサークルで、私が代表していたのは2011年と2012年度で、農業、農作業ボランティアとイベントの補助の主に2つの活動をしています。なぜこの2つの活動を行っているかということ、まず一つが、私たち学生側としては農作業がしたい、のんびりしたい、もう一度来たいというような、何かやりたいことがあったことと、地域からの要望がありました。イベントの手伝いが欲しいとか、アイデアが欲しい、一緒に地域づくりをして欲しいというような要望があり、分からないながらもお互いに何か協力しあえることがあるのではないかということで、協力して活動することになりました。なぜサークルを立ち上げたかということ、実は私としてはあまりサークルを立ち上げたくなかったのです。単に農作業をやりたかったという思いがあったので、地域で自分だけで活動したかったところがあるんですけど、ある人から「獣害レンジャーを立ち上げたいんだけど、協力してくれないか？」とお誘いがあり、私は「やります」というように返事したんですけど、色々あって立ち上げに至らなくて、その後になってサークルを立ち上げたという経緯があります。その頃は農学部というのは座学が多くて、実践をやりたいというところがあったようです。1年間通っただけだったら私はなにも農村のことを分からないのではないかというその漠然とした思いがあったのと、自分が少し成長したいという思いもあって、継続して通うことを目論んでいたようです。具体的な活動内容としては、丹波篠山と言えばやはり黒豆とか多いですので、黒豆、枝豆の収穫作業とか乾燥、調整作業を行っていました。そして時々山の中に入って獣害対策を行っていました。その他イベント補助、これは初年度に地域が冬に花火を上げて、何もやることがないから家にいるじいちゃんばあちゃんとかを喜ばせてあげたら良いのではないかということで、企画していたイベントを手伝ったりとか、あとは地域の春に採れる野草っていうのをみんなで食べる会を開催したら面白いのではないかと。実はこれは授業がきっかけで始まったことを好評だったので続けようということで、続けていくことを補助したりしていました。あとはオーソドックスに祭りの時に司会を頼まれたので手伝ったりとか、秋祭りの販売を手伝ったりしました。活動していくうちに色々自分の考えていることも変わってきたのですが、2011年度には農作業をやりたいとかイベントスタッフをやるうというような、やりたいとかやったら楽しいのではないかということを中心に活動していました。その頃は普通に作業するのが楽しかったし、大型機械に乗る経験はあまりないので楽しい、面白いですよね。普通に屋

台を出店するのもワイワイ出来たし、飲み会もできるのでいいじゃないかというようにやってたんですけど、「なぜ都市から篠山に通うの？」ということで、「農作業をやるねん」という形で冊子で取り上げられたりもしました。またよく言われることが、「若いのに地域活性化に関わっていてすごいだね」と言われもしました。そして1年間そのようなことを言われ続けると、何も考えずに楽しいことをやりたいということで、「地域活性化ってなんなんだ？」という点がもの凄く疑問になってきました。私たちが継続的に関わることで「地域は変わってくるんだけど、その変化っていうのはどういう意味を持ってるんだ？」「なんで変化させてしまっていていいんだろうか？」「いつかなくなる私たちの活動で変化してしまっていていいんだろうか？」ということがもの凄く疑問になったんです。かなり不定期に通っていたのですが、私はもっと地域の人を知らないといけないというふうに思いまして、農作業というものを「地域の人の意見を聞く場所にしよう」「イベントスタッフというものは地域のまちづくり活動との目標を知っていく場所にしていこう」というように位置付けて活動し始めました。1年間そういう形で活動した結果、農作業というものはまちづくり活動ではないなど。ただの個人の手伝いになるだけで、私たちがいなくなった後も続いていくわけではない。続けていこうと思えばその人をどんどん入れ続ける仕組み作りになるのですが、そういう仕組みとして農村ボランティアバンクというのがありました。でも、これも少しイメージと違うな、どうしたらいいんだろう。地域のイベントも私らが手伝うことで、手伝っている間は結構継続できましたし、規模もかなり大きくなってきました。最初はじいちゃんばあちゃんとか集落の人が集まれるようにというようなモチベーションだったり目的だったものが、だんだん外の人を地域に呼び込んでこようというような雰囲気になってきてるんです。ここでなし崩しに、だんだん盛り上がってきたから少し外の人も呼び込んだら面白いのではないかみたいな感じで変わってきたのです。私たちが関わったことでこういうように変わってきたりとか、個人の手伝いをしているとそれを通う人も出てくるわけなのですが、それをしていても、私がいなくなった後にどうなっていくのだろう、私たちがいなくなった後にそれが継続できるわけでもないし、例えば規模を拡大して内向きから外向きになったことは、本当に地域の魅力っていうものを活かしていけるものだったのかということが、私にはしっくりきませんでした。結局私たちが何をしたら地域にとって良いことで、まちづくりにこれから活かしていけるものなのかっていうのが分からなくなってしまって、そういう疑問とか、結局そういうところで動いているのは私と1、2人程度だったので、人手不足ということもあり、あと関わるとしたら私個人として関わりたいなというところまで来て、その時点で私は一応学生活動としての活動は終了しました。ただ、一人後輩がいたんですけれど、その後輩が続けたいと言ってくれたので、「ユース六篠」という形では今でも残ってまちづくりというのに関わっています。なんだかんだそういうことがあってまちづくり的なことから一端手を引いたのですが、色々な縁があって地域おこし協力隊になりました。ご存じかもしれませんが、少し紹介させていただきます。

地域おこし協力隊は総務省の事業で、都市住民を地方自治体が受け入れて、地域活動を行います。そしてその地区の定住、定着というものを目指しています。任期は1年更新の3年までで、地域や自治体からの委嘱を受けて、報酬と活動費を貰って活動ができます。篠山市の地域おこし協力隊の特徴は、まず全員が学生で院生であるということ。半学半域をやっているということ。その代わり報酬や活動費も半分で行ってくださいと。神戸大学にそういうコーディネーター業務っていうのを委託していて、コーディネーターを設置してくれているという形になります。「なぜ私が地域おこし協力隊に？」と、色々悩んだ結果離れてしまった私が協力隊に入ることにしたかという理由が、結局のところ私は農業がやりたかったので定住が目標だったんです。地域おこし協力隊の目標というのがやはり定住、定着を目指している点の一つあります。それに向けた準備とか挑戦というものを学生である今からできるというのが、私にとってはかなり大きなことなのかなという思いで活動を始めています。あとは半学、半域という点も実は効いていまして、大学の知識というものを自分の活動に活かしていける。生物多様性という領域をやっていると、生き物に配慮した農業というものを活動の軸にできるということで、今はそれを中心に活動しています。具体的に今行っている活動としては、実際に自分で無農薬栽培を行い、これは耕作放棄地でやり始めたんですけど、無農薬ですが普通にお米が採れるぐらいまでなりまして、生き物が戻ってくることも確認できました。生き物調査も実は行っていまして、篠山市内の放棄されている水

田とかを歩き回って生物を見て回っています。どこにどんな植物が残っているのかを調べています。なぜこのような活動をしているか。どちらも私の研究に絡んでいます。私の研究は、生物がどうしたら戻ってくるのかということの研究をしています。だからこのように自分が活動することによって、どうすれば効率的に生き物が戻ってくるのか。例えば草刈りはあまりしちゃいけないと。あまりしてしまうと植物がいなくなってしまうとか、こことか放棄されてしまうとまた植物がいなくなってしまう。そういうことを研究しているので、このようなことを調べるのは私の研究にとっても価値があるのです。そして移動カフェ、マルシェ事業というものにも地域おこし協力隊として取り組んでいて、「篠山市のことを外へアピールする」「集落のおばあちゃんとかが作っていたような地産品みたいなものを発掘して外に出していこう」という活動を今地域おこし協力隊の方では行っています。結局のところ私の自分の疑問は今でも思っていますし、解決してなくて、どういう風に関わったら良いのかということも、ここで今話を聞いていただくとおり、あまり地域の人のことが出てきていないんですね。なぜかと言うとその距離感っていうのが私はまだ掴みかねているというか、一応距離を取るというスタンスで、あまり近くにすぎないというスタンスでやっているのですが、外から来た人間がどの距離感を取って、どれだけの地域活動をすれば後々地域に残っていき、地域づくりに役立っていくような活動になるのかということについてまだ掴みかねているところがあります。なので取りあえず私は、まず私の身を立てるというところに主眼を置いて、それが結果的に地域づくりに活かしていけたらいいなということで、地域おこし協力隊の活動をやっているところです。

地域側と学生側の課題を挙げてくれということで、地域側としては学生はいつかなくなるようなものであることを認識して欲しいと思いました。私の活動した地域では、「お前らなしでは夏祭りも雪花火も出来へんかった」みたいなことをおっしゃるんですけど、そういうふうになってしまうと、「私たちがなくなった時どうするのだろう？」ということを実際に今思っているところです。学生側の意識としては、少なくとも地域で活動していると、少なからず地域側からそういうことを言われることになるんですね。だから自分たちの行っていることというのが「どのようにその地域に影響を与えていて、後々に続いていくようなものなのか？」とか、「相手側をどのように変えてしまっているのか？」というものを真剣に考えてみた方がいいのではないかとこのように活動していて感じるところです。

最後になりますが、学生へのアドバイスとして、まず、私は一緒に活動できる仲間が1番重要だと思います。意見は違っていいし、議論できる仲間というものは必要だと思います。私は基本的に人手不足ということで、あまりそういうことを話す人がいなかったんです。結局地域での課題というか、活動していて悩んだことがあったとしても、それを共有できる人がいませんでした。これは結構私もしんどかったと今では思っています。活動を止めてから、今はそういうことを色々話しながら地域おこし協力隊を複数人でやっているの、疑問に思ったこととか悩みに繋がるようなことは話しながら、その都度その都度こういうふうにしたらいけないかということをお話しながらできる、そういう状態っていうのは地域に入る上では良い状況だと思っています。最後に、地域での活動は楽しんでやってください。先ほど松田さんは3つの円を示して整理してくださいましたけれど、やはり地域での活動は楽しくやらないと続かないというふうには思います。私がなぜその2、3年で農作業ボランティアみたいなことができていたかと言うと、私は農作業というか農業が好きだったからということが大きくあって、それで結果的に、今年で5年目の地域おこし協力隊で何かしら動いているということにつながってくるので、何かやりたくないことをやって楽しめないくらいだったら来なくていいのではないかなというふうには私は思うので、楽しんで楽しめる活動をやってほしいなと思います。ご静聴ありがとうございました。



本日の内容

- 自己紹介
- 丹波地域での活動内容
 - サークル活動(ユース六篠)
 - 篠山市地域おこし協力隊
- 地域と学生の課題
- 学生へのアドバイス

自己紹介

- 所属
 - 神戸大学 人間発達環境学研究所
 - 生物多様性研究室
 - 他機関の関係性やその動態のメカニズム
- 篠山との関わり
 - 実は農学部出身...なので**農業好き**
 - 2010年度「農業農村フィールド演習」
 - 2011年度 学生サークル「ユース六篠」立ち上げ
 - 2014年度 篠山市地域おこし協力隊 委嘱




ユース六篠とは？

- 2010年度 農業農村フィールド演習が母体
- 代表をしていたのは2011年度・2012年度
 - 主に二つの活動
 - 「農作業ボランティア」「地域イベントの補助」

学生側

- ・ 農作業がしたい
- ・ のんびりしたい
- ・ もう一度来たい



地域側

- ・ イベントの手伝いが欲しい
- ・ アイディアが欲しい
- ・ 一緒に地域づくりをして欲しい



なぜサークルを立ち上げた？

- 基本的に個人プレーの人間
- お誘いが来た
 - 「歓喜レンジャーを立ち上げたいんだけどやってみないか？」
 - 「やりませーす！」
 - 残念ながら立ち上げに至らず、代わりにサークルを立ち上げる

あとは

- 「産学」→「実践」
- 継続して通うことによる、各自の成長を意識してたらしい

(当時の企画書より あんまり覚えてない...)

ユース六篠での活動

- 農作業ボランティア



ユース六篠での活動

・ 地域イベント補助



ユース六篠での活動-意識の変化-

・ 2011年度

- 農作業がやりたい！
 - ・ 単純に“作業は楽しい”！
 - ・ トラクターに乗ってみたい！
- イベントスタッフをやろう！
 - ・ 舞台するのは楽しい！
 - ・ 夜に地域の人と飲み会もできるし！



よく言われるコメント

- ・ 若いのに地域活性化に関わって凄いね！
- ・ 農作業を手伝ってくれるんか！俺んところにも来てくれ！

ユース六篠での活動-意識の変化-

・ 2012年度

- 地域活性化って何？
- 継続的な関わることで、地域は変わる？活動の意味はある？
- 定期的に行って考えてよう！
- 農作業 → 「地域の人の意見を聞く場所」
自分で歩いて、相手を見つける
- イベントスタッフ → 「地域の活動・目標を知る場所」
企画段階から関わっていく

ユース六篠での活動 - 解散？？-

・ 農作業

- 補助したってそれは「個人」の手伝いになるだけ
- いなくなった後、どうする？
- 「農村ボランティアバンク」(一)でもなにかイメージとして違う

・ イベント

- 学生に頼り切った状態で規模拡大
- 内向き → 外向き

結局の所、“何が地域に取っていいのがよく分からない”

- ・ 取り組みに対する疑問
- ・ 慢性的な人手不足



ユース六篠は解散しようかな…
(関わるならば「長井個人」としてが
しい気がするなあ)

地域おこし協力隊での活動

・ 地域おこし協力隊とは？

- 2009年から総務省が導入した制度
- 地方自治体が都市住民を受け入れ、隊員はさまざまな地域活動をし
ながら、地域への定住・定着を目指す

・ 特徴

- 任期は1年から3年(1年契約の延長が3年目まで)
- 地方自治体から委嘱を受けて活動
- 住民票を活動地域に移動
- 隊員一人につき上限400万円を特別(交付税)として支給
(報酬上限200万円、活動費上限200万円)

地域おこし協力隊での活動

・ 篠山市地域おこし協力隊の特徴

- 全隊員が学生・院生(=“半学半域”)
- 各隊員の報酬・活動費は通常の1/2
- 篠山市は地域おこし協力隊事業の業務を神戸大学に委託
- 隊員の活動地域の自治組織が受け入れ窓口となる
- 全体委員を統括し、郭主体を調整するコーディネーターの設
置

地域おこし協力隊での活動

- なぜ協力隊に入ることにしたか？
 - “定住”が目標であるということ
 - それに向けた準備・挑戦が今からして行けるということ
- 半学半域
 - 大学の知識とは？→「生物多様性」に関する知識
 - 目標・農業で生計を立てたい
 - 生き物に配慮した農業という物を活動の軸にできないか？

地域おこし協力隊での活動

- 環境保全型農業
 - 自分で稲農業栽培をやってみる
 - “手間を減らす”という意識
- 生き物調査
 - 篠山市内での調査
 - 主に放棄されがちな未圃場整備地の水田稲野
- 移動カフェ・マルシェ事業
 - 篠山市街へのアピール
 - 地域で“儲けている”製品の発掘



地域と学生の課題

- 地域側
 - 学生はいつかなくなる
 - あまり当てにした計画にしないで欲しい
- 学生側
 - 地域づくりという物に少なからず関わるのだから真剣に！

学生へのアドバイス

- 一緒に行動できる仲間を見つける
 - 意見は違ってもいい
 - 議論できる仲間を見つけよう
 - 悩みを共有できる人を作ろう

ちなみに・・・

本当の意味で一緒に活動できると思った人ができたのは、代表を辞めてからです

- 地域での活動は楽しんで！

8. フリーディスカッション・ワークショップ

コーディネーター 関西学院大学総合政策学部 准教授 清水 陽子

参加学生が5つのグループに分かれ、各班をプロジェクトチームと仮定し、「地域と学生の両者にとって良い活動」について提案した。その後、結果発表を行い、ゲストや大学関係者から講評をいただいた。

《1班》

1班では「継続すること」、「人を巻き込むこと」、「お互いを知ること」という3つの意見が出て、その中でも1番大切なのは、「お互いを知ること」が大事だという意見が出ました。まず最初に、地域にとって良い活動、学生にとって良い活動というのをたくさん出していこうということで、3つ出しました。学生さんたちは、自分たち学生にとって良い活動というのは分かりますが、地域にとって良い活動については飽くまで推測でしかないので、自分達がやりたいことを地域の人はこう思っているのではないかという考えが、地域の人はそのように思っていないのにというのがあったりしたら、ニーズにマッチしてないじゃないかという意見が出てきたので、そもそも地域の要望を知らないといけない。知った上でどんな小さなイベントとか、どんな些細なことでもいってお互いに「それええな」って言える活動があれば、それが一番良い活動なのではと思いました。地域の人も「本当にやってくれてありがとう」、学生の人も「そんな場を提供してくれて本当にありがとうございます。学びになりました。」といったことが実現できるのは、まずお互いのニーズを合わせて知るところなのではないかなということで、意見がまとまりました。



《2班》

2班はまず学生にとって良い活動と地域にとって良い活動の2つに分けて考えてみました。色々意見を出した結果、残った意見は住民にとっても学生にとっても良い活動、その中で票の数が多かった3つを選んでおります。まず第1に、実現できる活動は、やはり地域も予算を出して学生を呼んでくださっており、私たちが自分たちの学生生活の貴重な時間を使っているということで、実現して形に残して、成果として評価される活動が良い活動ではないかなと考えました。第2に、知り合いや友達が出来るとい意見が出ました。知り合い、友達は学生同士であったり、学生と地域の方であったり、また地域と地域の方であったり、そういう知った顔ができるというのが1番良いのかなと思っています。あと柏原高校の生徒さんが、厄神祭りがきっかけで友達が出来、そこで盛り上がったというエピソードがあります。最後に、地域の新しい魅力を発見できる活動として、地域の既に発見されている魅力を深めてPRすることも大事だと思いますが、学生と地域が一緒になって活動することにより新しい魅力を発見できることで、また新たな活動の幅が広がるので、この点についても大切だと思っています。



《3班》

3班は良い活動の「良い」のところから入って、左側の方が様々な意見が出てそれを形にしたんですけど、中心にあったのが主体は地域ということがあって、そこから色々なところに派生してるなという状況で、主体は地域、学生はバックアップというところで、先ほどのお話にもありましたが継続性というところで学生としても期間的に活動の限界があります。そういったところから、学生の外からの目線で地域の気付いてない魅力やそういったところをどんどん提案して行って、イベントなどを地域が主体となって行っていく。そして地域が主体となって行っていく中で、学生たちも団体であれば、そういった活動を引き継いでいく。もしその団体が引き継げなかったとしても、地域が長期的にそういったイベントとか新しく気付いた魅力っていうのを続けられるように継続的に行うといった関係性がお互いにとって良い関係性なんじゃないかなということになりました。



《4班》

私たちが考えたのは、学生も地域もお互いがどうすればお互いに「おいしい」活動ができるかという点について考えました。例えば学生にとっても地域の方にとっても交流するというのは双方にとって「おいしい」活動で、学生の方も実際に地域の方と交流して意見が聞けるし、地域の方も若い学生と交流することで普段とは違った会話から刺激を受けることができるということです。それ以外にも地域にとって学生が実際に活動することによって、その活動がほかの行政からも注目されて取り上げられるということや、また「はたもり」のお祭りに参加して、普段会わない地域の人が会うことができるということからヒントを得たんですけど、地域の人と集まる機会ができるということ、あと他にも学生にとっては実際にフィールドをお借りして実践演習が出来るってということや、やはり責任はあるのですが、楽しんで実際に地域に行くことで、活動できるということなどが考えられます。



《5班》

5班は学生と地域の関わり方について話し合いました。このような活動は学生の成長の場であるとともに、地域の人にとっても喜ばれることである方がいいねとか、学生目線と地域のニーズが融合したらいいねということを話し合いました。そのために短期的にどういう成果を出すかという点が必要ですし、まちづくりというのは長く時間が掛かるものなので、それが長期的にどういう効果があるのかとか、そういうことを見る必要があるのではないかなという意見がでました。その一方で、地域づくりは長くかかるのですが、長い間



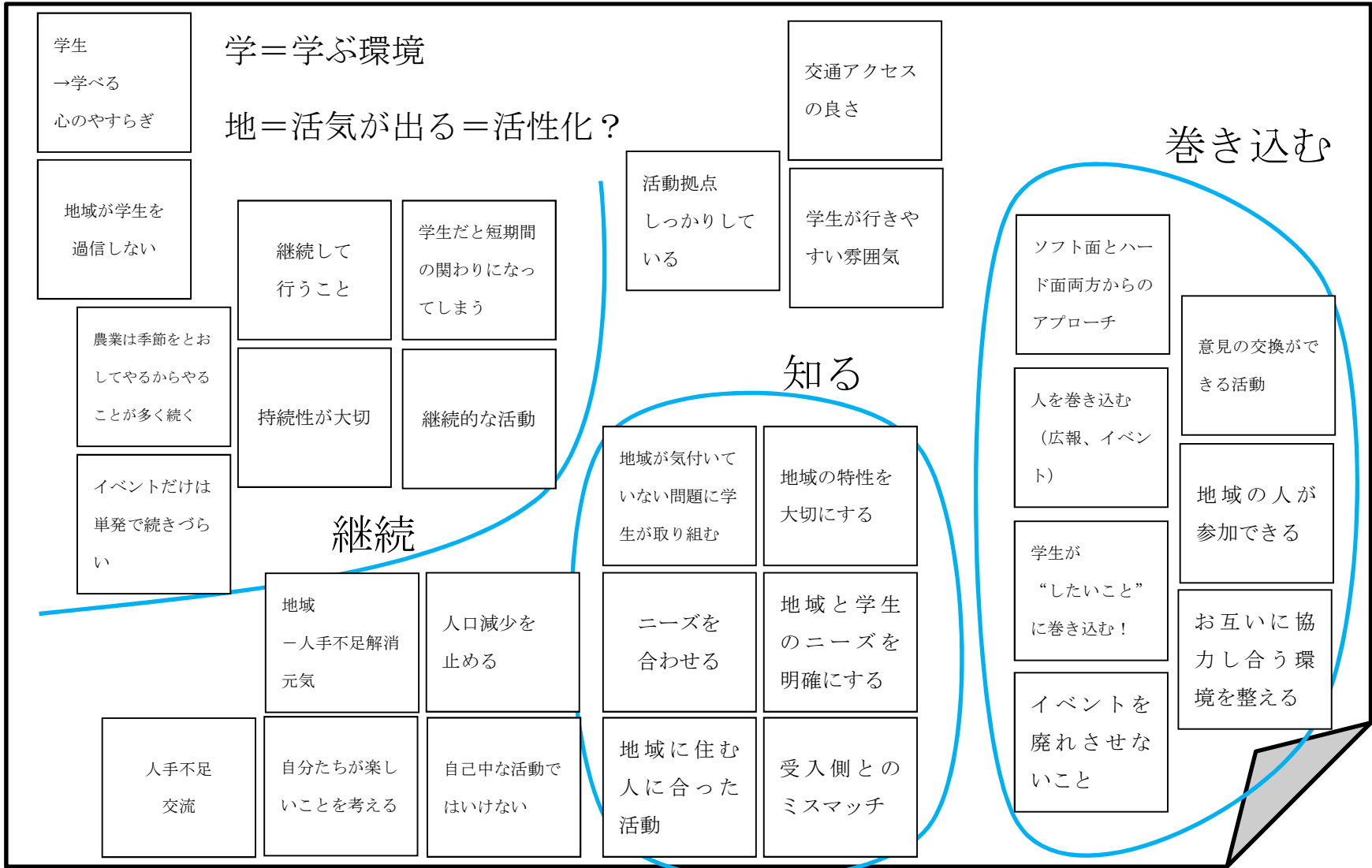
に学生のニーズも変わるし、地域の状況もどんどん変わっていくと思うので、地域づくりは地域の人が長く関わってというのは当たり前だと思うのですが、学生も長く関わった方が良いのかであるとか、逆に継続するとか長い深い付き合いをすることが本当に良いのかなというのも、ある意味深くなりすぎて、深いっていうのはマイナスもあるのではないかな。浅いから良いこととか、あるいは地域との深い関わり、浅い関わりの両方を使いこなせるようになった方が良いのではというような意見が出ました。

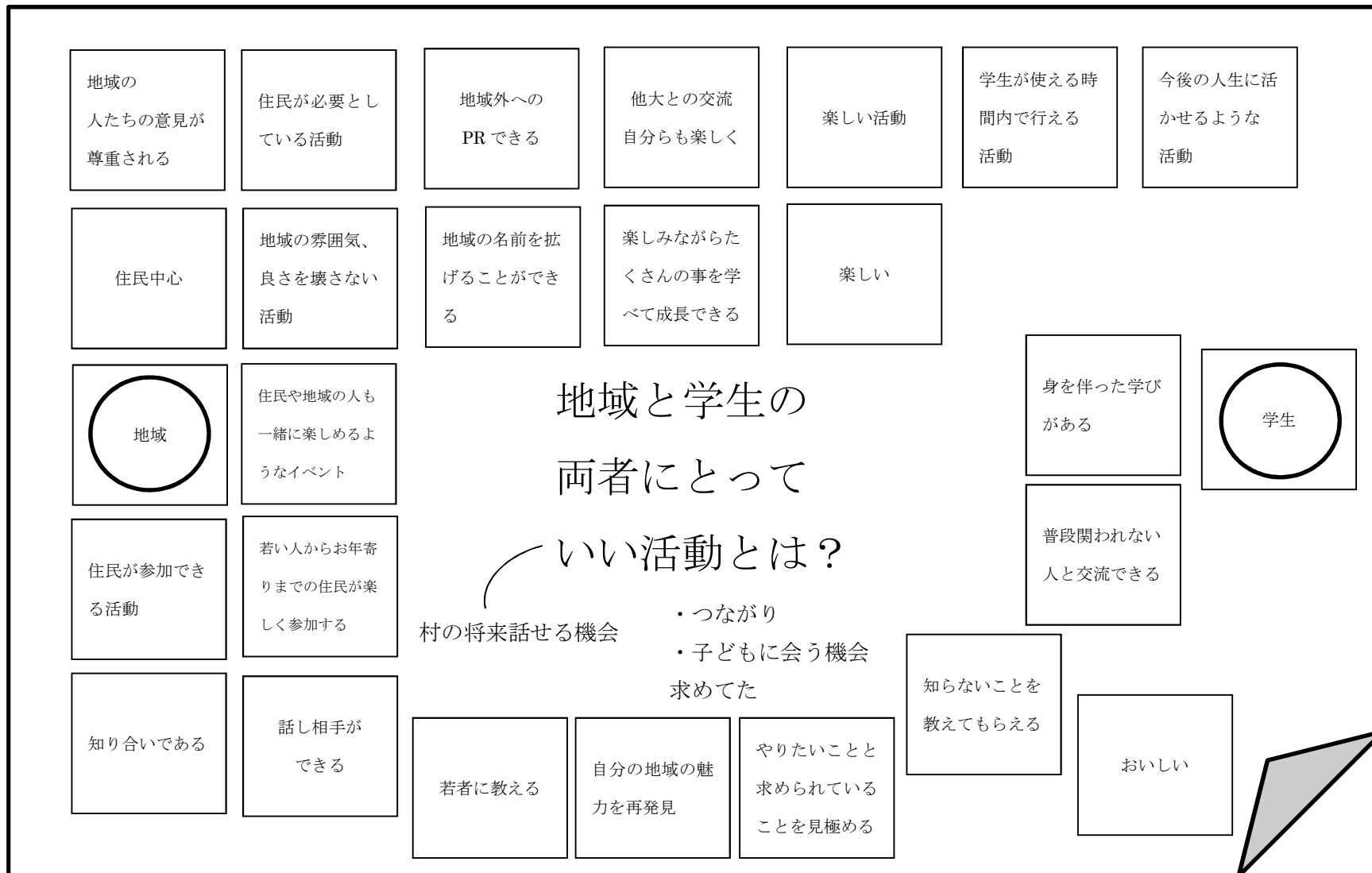
〈コーディネーター〉

皆さん短い時間の中で本当に漠然としたお題で申し訳なかったのですが、しっかりまとめていただいてありがとうございました。1班が指摘してくださったとおり、今回の「地域と学生の両者にとって」というところで、ここの場にいるのは学生の方しかないのですが、これを解決しようと思うと、やはり地域の方をもっと巻き込んで、本来ならディスカッションに入っただけぐらいのことでやらないといけなかったのだろうということは、もちろんやる前から分かっていたのです。できることなら地域の方で1班作って、地域の方から「じゃあ学生に対してこのようなことをして欲しいんだ」というようなことを拾い上げられたらなということ、このディスカッションをする時に少し考えていたのですが、今回は皆さんだけの意見になってしまいました。とはいえ、皆さんはこう考えるという成果は得られたと思います。ただ、やはり一方の見方しか出来ていないということは事実だと思います。しかしその中で、「お互いを知らない」とか、「交流が必要」とか、「色々なことを色々な方と話さなきゃいけない」という意見が出たことが私は非常に大事だと思っています。今回短時間のワークショップで答えが出ないかもしれないということ、県民局の方ともしようがないよねというところはあったのですが、何よりこのフォーラムは日頃全然違う環境で生活されている皆さんが1つのテーブルで話をし、交流の場が出来るという点が大きな目的だったというように思っていますので、できたら皆さんでメールの交換、アドレスの交換を試みるとか、また「こんな活動をするんだけど一緒にどう？」というような声を掛け合えるような関係づくりがもしできたなら、それで1つの大きな成果になったのではないかと思います。

(3) フリーディスカッション発表資料

1 班





2班

やくじん
(祭り)

地域の新しい
魅力発見

友達ができる！

知り合いが
できる

実現できる
活動！

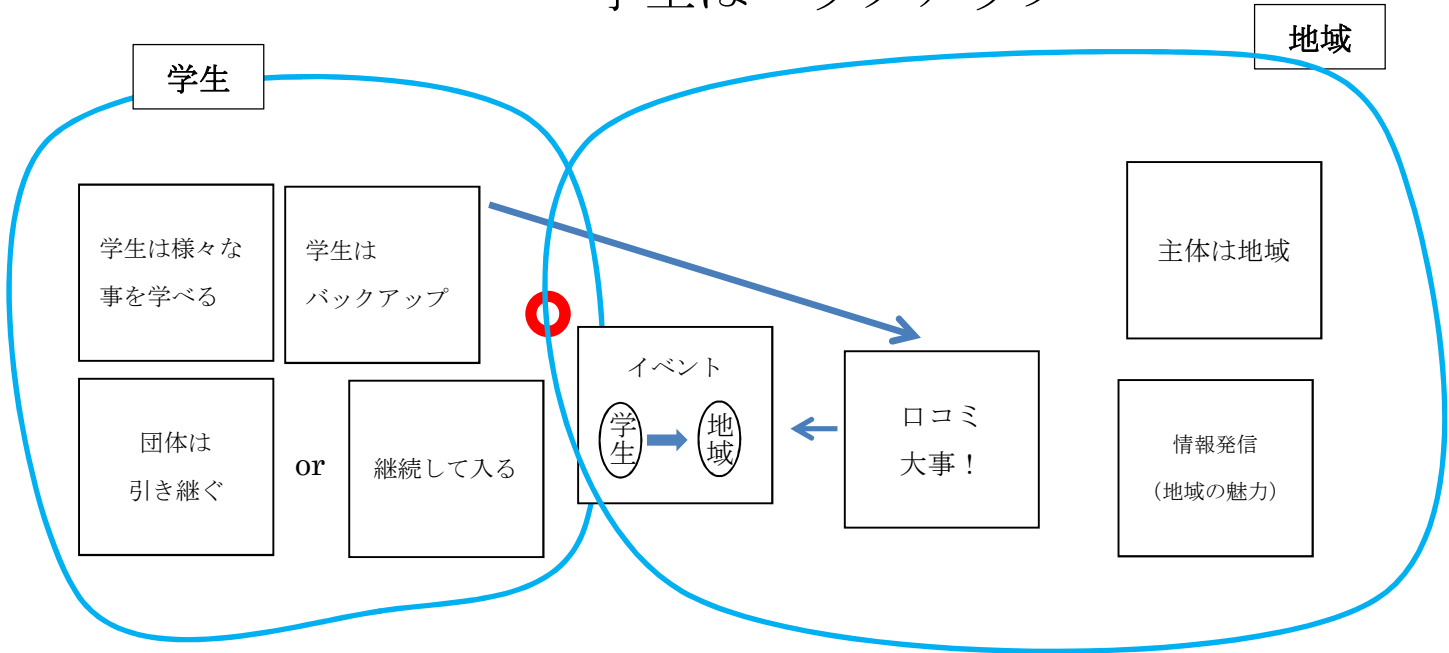
知り合い
友達が
できる活動

地域の
新しい魅力を
発見できる

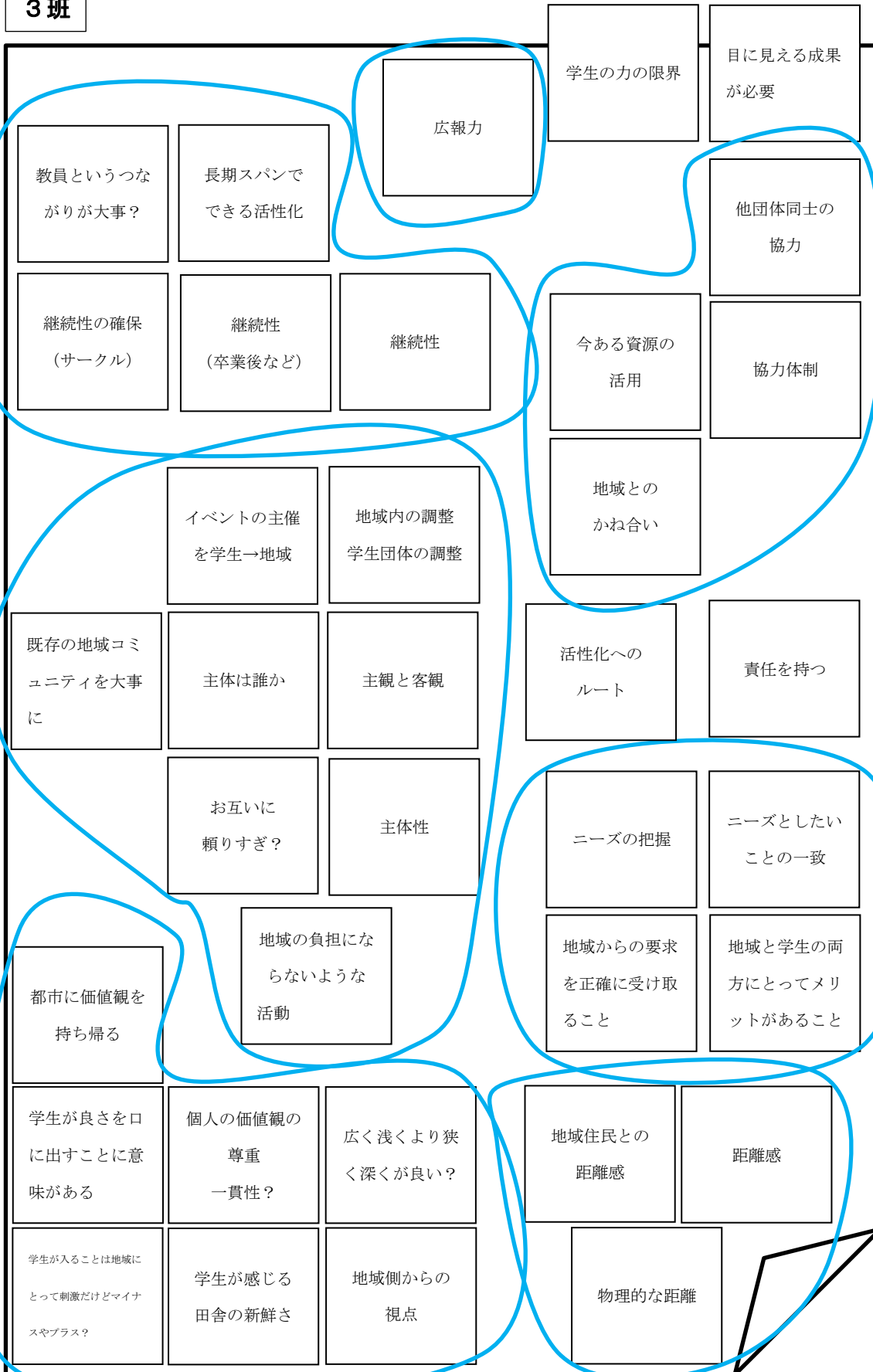
地域での問題を
利用する

主体は地域

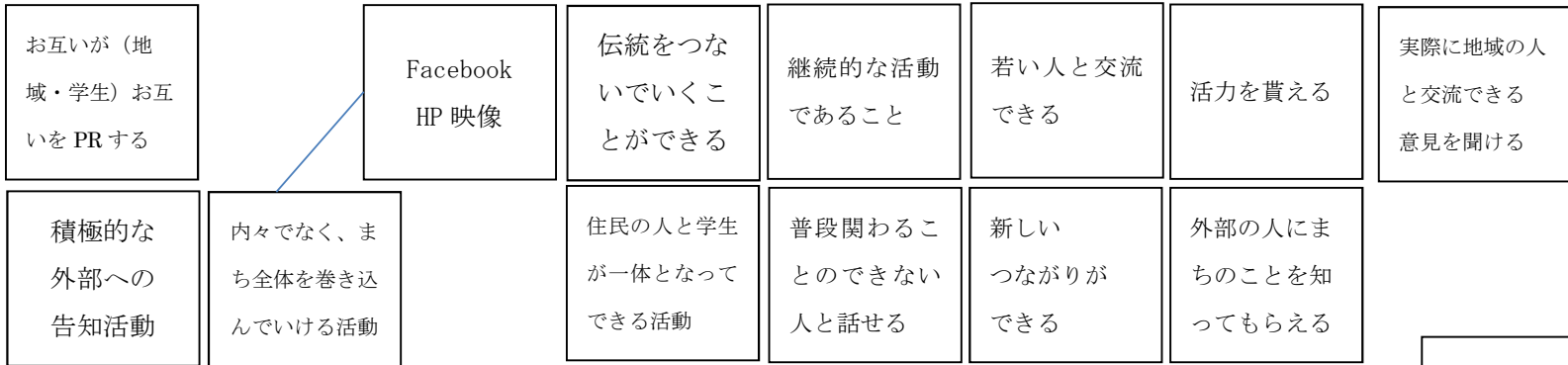
学生はバックアップ



3班

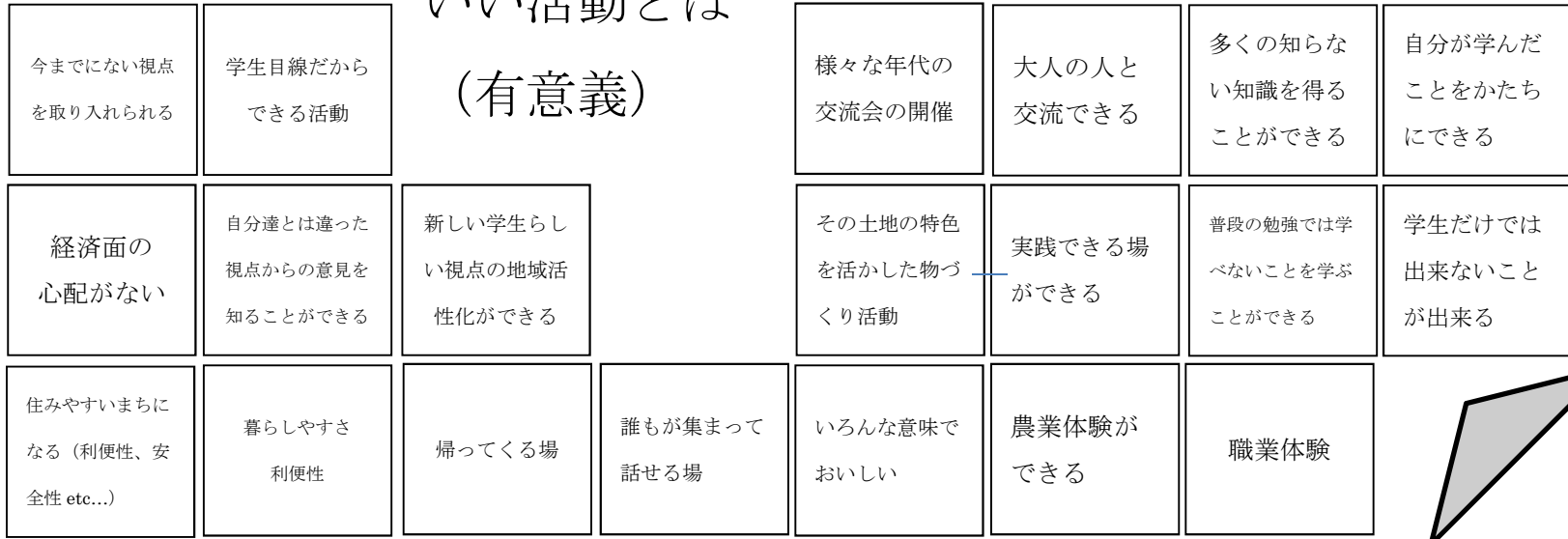


4班

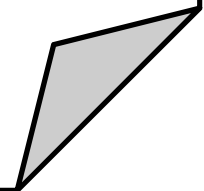


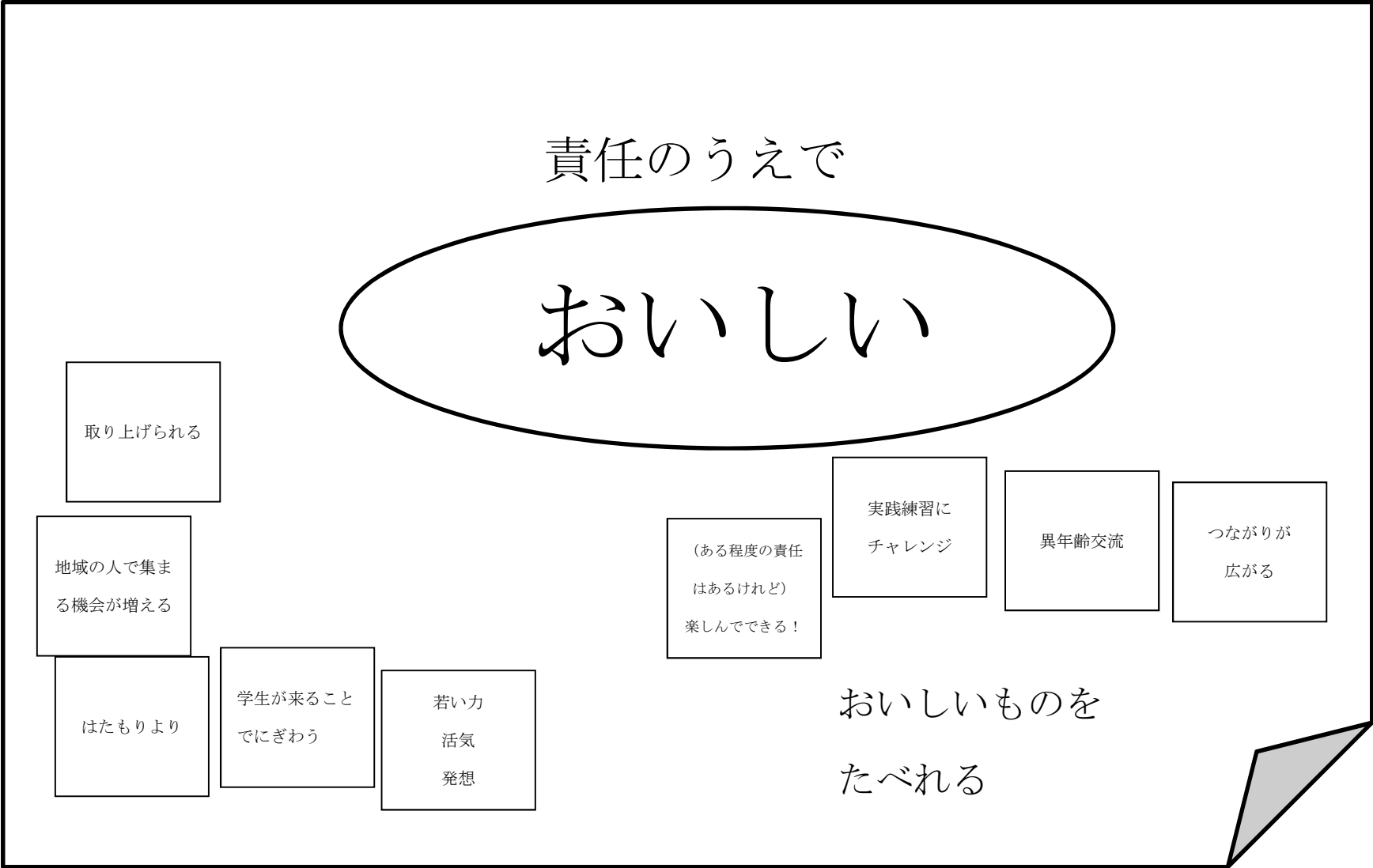
地域と学生両方にとって

いい活動とは
(有意義)

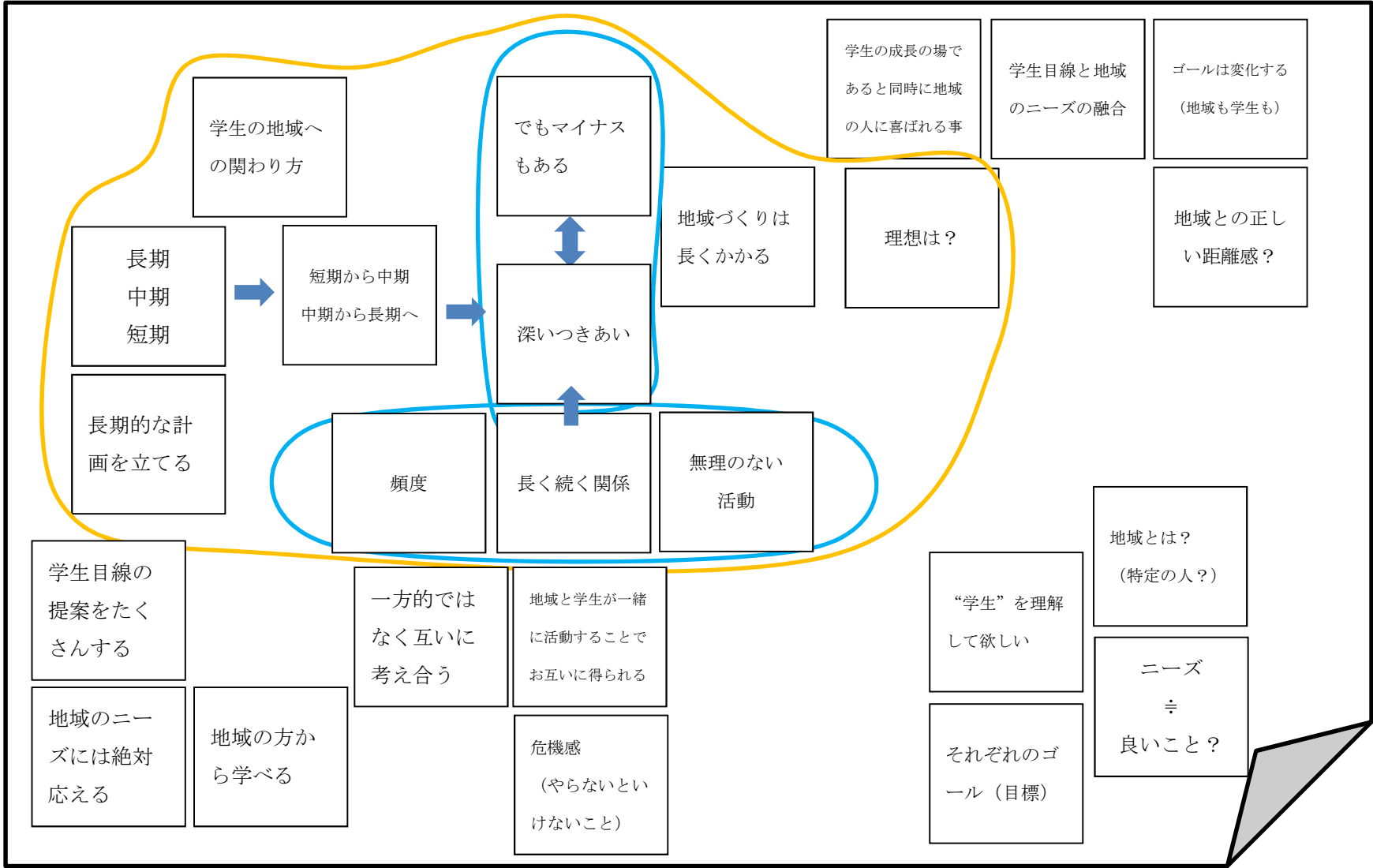


楽しく活動
できる





5班



9. 講評

(1) 関西大学 TAFS 佐治スタジオ 室長 出町 慎

関西大学佐治スタジオの出町です。本日は関西大学の学生は参加できなかったのですが、丹波市青垣町で地域の人と一緒に色々な活動しております。ですので、今日ワークショップのテーマになっている良い活動というのは常に命題としてあって、皆さん色々な議論をされましたが、実は答えがないというか、正解がない難しい議論だったと思います。おそらく私たちが色々な人と議論してもなかなか答えは出ないかもしれないし、その都度その都度答えは違ってくるかもしれないし、けれどもこういった活動、地域の中でいろんな活動を継続している上で、ずっとつきまってくる話です。大切なことは本日議論したということのを忘れずに、色々な活動をする中で常に自問自答、仲間と議論したり地域の方と議論したりしながら、お互いにとって良い活動って何なのかっていうことを議論してくれたらいいかなと思います。そういうきっかけとしては、今日のフォーラムは良かったのかなと思っています。ですので自分たちにとって良い活動というものはイメージできますけど、地元の方にとって良い活動というのは本当にイメージしにくいと思います。それはたぶん活動して、地域の方と交流して分かるものだと思いますので、拠点があるところは是非その拠点を使って滞在をして、地元の方と交流を深めて、その中で自問自答や色々な人と今回のテーマを議論しながら活動を続けてもらえればいいかなと思っています。私たち青垣町佐治スタジオはいつでも使っていて構いませんので、活動する際には色々なことで連携できればいいと思いますので、またお声掛けください。本日はお疲れ様でした。



(2) 京都大学大学院地球環境学堂持続的農村開発論分野 助教 鬼塚 健一郎

京都大学の鬼塚と申します。私どもは学校の演習で、研究を含めて、よくワークショップを実施するのですが、このような形で40分、45分で結構難しい哲学的なテーマを扱うということは大変だったと思います。本当にお疲れ様でした。私も農村地域の地域づくりに関わって研究しているのですが、今日長井様と松田様の実体験を踏まえた形で「色々なジレンマがある」とか、「必ずしも良いことばかりじゃなくて、色々壁にぶち当たることもある」というお話は正にすばらしいお話だったと思いますし、私も非常に感銘を受けました。私もそのように感じたところもあるわけなんですけど、皆さんもおそらくある程度何かしら地域に関わって活動されているということで、そういういろんなジレンマにぶつかることもあるのではないかと思います。特にこの年代は、自分のことと地域のことの両面考えなければいけないということで、そのバランスを取るといことはかなり難しい問題だと思います。先程のまとめとしましては、清水先生がおっしゃったように、最終的には地域の方が入って、地域の方の意見を踏まえて作り上げていくのが私もベストだとは思いますが、一方でこういった形で実際に地域に色々な形で入られている皆さんが、それぞれぶつかる何かしら壁だとかを、こういった色々混ざった形でぶつけ合う場があるということは、実は非常に貴重だと思います。そういった意味でこのフォーラムは大変意義がある活動ではないかなと今感じております。本日は偶然にもこのような機会に参加することができまして、大変嬉しく思っております。お疲れ様でした。ありがとうございます。



(3) まちづくり柏原 代表取締役 荻野 吉彦

皆さん方には色々と、柏原も回っていただきましたし、本日のディスカッションありがとうございました。いつも不思議に思うのですが、地域のまちおこしというテーマで皆さん日本中の多くの大学が入られています。なぜ都会のまちおこしがしないのかないつも思っているんです。底流に、日本人が持っているやさしさ、先ほど京都大学が入っている桑原地区で「人はええんや。ここは本当に寒いのを我慢したら十分天国や」という話がありました。日本人が持っているやさしさとか、協調性とかそういうところに今画一化されている。私は段階の世代なのですが、学校を出てほとんどの者が都会に出て就職して家を建ててというのが道筋でした。今はなかなかそういうことになりません。やはり画一化された人生ではなく、中にはこういう田舎暮らしもいいのではないかと。または心の穏やかさ、経済的な充足よりも心の穏やかさを求める人も出てきているという時代の中で、私たちの時代そうでしたが、大学はいつの時代でも同じで、時間は十分あるけど金がない。そういう学生が、少し自分もそういうところ出身なんですけど、親の話を聞いていると、「昔はこうだった。もう少し賑わいがあった。」という中で、賑わいを取り戻すだけではなく、人間関係も失われつつあるものを取り返すきっかけに皆さんがなっていきたいなら非常に嬉しいと思います。私は段階の世代ですので、皆様方のおじいちゃんとはいきませんが、まちづくりに関わってから約13年になります。決して私が手を挙げて、「私は柏原のためにやるんだ」ということではなく、たまたま13年前に会社が出来たときにそういう役に就かなければならない立場にいたということだけです。ですけど、この地域のしがらみとかそういう中で、これは無責任なことではできないなどの思いから今も活動しております。これは日本人が持っている遺伝子ではないかなと私は自分に言い聞かせております。皆さんも都会でワイワイするのも良いことだと思いますが、ある時が過ぎれば地域おこしのためにこの経験を活かして日本全国で頑張っていれば嬉しいと思います。ありがとうございました。



(4) 関西学院大学法学部 教授 山下 淳

皆さん1日ご苦労様でした。初めに渡辺さんからユニバーサルデザインの話がありました。そういうものを学生にもということでしたが、去年の4年生の学生がユニバーサルデザインをやろうというので市役所を訪れました。市役所で「え、なにそれ」と言われました。ユニバーサルデザインとか福祉を担当している部署と地域や新産業を担当している部署が全然連携していません。結論から言うと、学生は「そんなことを聞きに来られても」と言われ、そこで止まってしまいました。柏原でゼミの学生と一緒に関わっていて、少し大きな問題だと思うのは、市役所がもう少しトータルとして我々の活動と関わって欲しいなという印象を持っています。もちろん中心市街地活性化の関係で新産業創造課とは色々お願いもしていますが、それ以外の市役所の担当課にももう少し関わりを持っていただきたいなと思っています。これまで経験を踏まえてお願いしておきたいと思います。それから、本来調べるべきことが2つ目です。学生の皆さんにとって、こう何度も柏原のまち歩きをしているという人もいますし、今日初めてという学生の皆さんもいたと思いますが、柏原のまちは皆さんの心にどのように映りましたか？つまり、地域のため云々という話になってしまいましたが、私自身そのもう少し手前の、まずもって皆さんの目にこの柏原の町並みって言うのはどういうふう映っているのか？



あるいは柏原でお話をした、あるいはすれ違ったこの地域に住んでおられる方が、いったいどのように目に映ってますか？そこがやはり一番大事ではないかと私は思っています。人間というのは、それなりのバイアスを持って物を見ます。これはおそらく抜けられないのだろうと思うのですが、従ってそれなりに20年近く生きてきて、あるいは自分が生まれ育ったところと比べて、それぞれ皆さんいったい柏原ってどういうふうに見えた？どういうふう感じた？どういう印象を持った？そこを本当はお互いに出し合うという作業をした方が良かったかなと思っています。もちろんそういう形で皆さんの柏原という地域への評価はそれぞれ違うんだろうけれども、そういう違う中でいったい皆さんどういふうにこの柏原という地域との関わり合いを作っていこうとされるのか。どのように地域づくりという活動をやっていこうとされるのか。何のためにこういう活動をやっているのかということを考えるという話にもつながってくるのかなという印象を持っています。「法学部のしかも政治学科でなくて法学部の法律学科の学生がなぜこのようなまちづくりのフィールドワークをやっているのか？」についてよく聞かれるのですが、私も聞きたいと思っています。私のゼミの学生は、なぜまちづくりのフィールドワークやるぞって手を挙げてゼミに入ってくるんだろう。いったいどのようなことを考えてやってくるんだろうか。もう少し法律の勉強をやってほしいなという気持ちがないわけではないですが、そういうところから私自身いったいどういう気持ちで入ってきたのか分からない学生を引き連れて、ここ数年柏原でまちづくりのフィールドワークをやっているのですが、そういう意味で今日の皆さん方の議論というのは私もよく分からないというか、私もずっと悩んでいます。長井さんがおっしゃる距離について、私も本当悩んでいます。私の場合はもう一つ、私と学生との距離というものにももの凄く悩んでいます。しかし、距離を考えるというのはやはり大事なんだろうなと思いました。適切な距離っていうものはいったいなんだろうか。地域との関わり、地域で活動されている方との関わり、県民局とか市役所との関わり、それらにおいてどういう距離というのが一番良いのだろうかというのは、答えは出ないけれども考えなくてはならないことなんだろうなというのが、私が今日の皆さん方の様子を見た感想です。そういう意味で私自身も、改めてもう少しシリアスに自分自身考えなくてはいけないなと感じたところです。

以上ですが、大学の教師というのは高校の教師と違って、学生に対して叱るということを基本的にしません。というのは、大学の教師の場合、叱っても全然効果がないということをよく分かっているからです。ですので、私はもう叱りません。褒めもしません。ただ、一旦関わった以上、柏原という地域に関わった以上、やはり真面目にやって欲しい、やらなくてはいけないんだという指摘というのは、本当に真面目に受け止めてください。中途半端に投げ出すということは、色々な関わりを作っていく中で敵前逃亡みたいなものだということも自覚していただきたいなと思います。真面目にやろう。何が真面目かというのは各々考えて欲しいのですが、真面目にやろう。真面目にやったら、何かしらの展望が見えてくるな、地域との距離もある程度検討がついてくるなというような希望は持ちたいな私は思っています。ありがとうございました。

(5) 関西学院大学総合政策学部 准教授 客野 尚志

冒頭でお話させていただきました関西学院大学の客野と申します。今日のお話を聞いて思い出したのですが、去る10月にこの授業とは別に私が顧問をしている都市研究会というサークルがあり、それは完全なボランティアですが、西脇の地域おこしを手伝っていきまして、それがお祭りをやるということで足を運んでみたところ、すごい頑張っていました。その都市研究会の卒業生、OBOGが遊びに来ていて、その子達と「頑張ってるな」という話をしていたら、「私ら今日の昼柏原に行ってきたんです。」って言うていて、ふと思い出しました。都市研究会が出来たきっかけが、この柏原でのまちづくりの授業なんですよ。この柏原のまちづくりの授業で一週間泊まり込んで色々作業をして、自分なりに考え、悩み、これでいいのかと考えながら



やってきた。そういう経験からサークルを作って、丹波を飛び出して対外的に活動している。なおかつ、これらの柏原の学生さんたちが大学を卒業した後も社会人になっても久しぶりに柏原に行きたいということを荻野さんに言われてお世話になったということを知っていますけれど、そこに行って懐かしい思いをして帰ることが出来たということなので、まず学生にとっては、皆さんもそうですけれど、神戸大のみなさんも授業で始まったことからサークルになって、それから地域おこし協力隊になっている方もいらっしゃいますので、丹波で色々勉強したことが実を結んで、他地域に、あるいは様々な他のフィールドの効果というのが波及しているのではないかなと感じています。それと、学生にとってもそうやって集まる場所というか、もう1回丹波に帰ってこようと思えることが丹波のすごいところですし、彼らもそれだけ頑張ったということですし、たぶん神戸大の皆さんが先ほど発表の中で「就職した後に戻ってくる」という話をされていましたけれど、正にそれは彼らにとってもいい思い出になったからこそ戻って来ることができるし、一生懸命やってきたからこそ胸を張って戻って来ることができると思いますので、そういった意味でも学生にとって非常にプラスになったのではないかなと思います。

もう一つだけお話したいのですが、これは私自身の経験なのですが、3.11の2ヶ月ぐらい後に、学生と一緒に宮城県のある離島にボランティアとして入ったんです。外壁除去を行ったりしたのですが、その時に、地域で一生懸命倒壊した家屋から物を探し出しているご夫婦がいらっしゃって、少しお話を伺ったんですけれども、いま私たち学生が行ってもたいしたことはできないんです。ただ、お話を聞いている中で最後にありがとうございますとおっしゃっていただいて、私たちは最初わからなかったのですが、話をしたこと、話を聞いてくれたということで非常に感謝していただきました。私たちは本当に恥ずかしい限りだったのですが、地域おこしで入っていく中でも同じで、まずそのお話をお聞きして、その地域の課題であるとか、地域の考えていること、それから地域のことで、歴史のことで、建築のことで、自然のことでなんでも構わないので、それを聞いて、真剣に関心を持ってお聞きするというのが入り口だと思いますし、皆さん実はそうされていると思うのですが、そういったことを1つ1つ積み重ねていくしかないのではないかなと思います。先ほどおっしゃった距離感の問題というのも、実は私も答えが全然出ていませんし、今でも分かりませんが、真摯な態度で真摯にお話をお伺いすることがまず第一で、そして、これがゴールなのではないかという気がしております。皆さんは非常に良い活動をされていると思いますので、是非継続していただければと思います。ありがとうございました。

10. 神戸大学と地元レストランが共同開発した試作品について

神戸大学大学院農学研究科 特命助教 布施 未恵子

今ご紹介いただきました布施と申します。実はこのフォーラムで毎回スイーツを提供しております。毎年違うものを提供しているのですが、皆さんこのスイーツには何が入っていると思いますか？前に資料を出しておりますが、先ほど「はたもり」の紹介で「みたけの里づくり協議会」という畑地区の話題が出ていましたが、そこは祭りのこともさることながら、猿がよく出る獣害のひどい地域です。いま全国的に柿が熊や猿、鹿といった動物が里に出てくる原因ではないかと言われていて、それをみんなで早めにとり除くというイベントを2年続けて行っています。そこで甘い柿を食べるのは普通なのですが、今年作りました干し柿が中に入っています。干し柿のねっとり感を味わってもらうために、篠山の「ささらい」というレストランのオーナーに作っていただいたんですけど、ねっとり感を出すためにクリームチーズを合わせ、あとパッションフルーツを少し練り込んで混ぜて味を整えているということでした。上は彩りを出すためにイチゴのムースになっているそうです。是非感想を聞かせていただいて、干し柿はあまり食べられないけれどこれなら食べられますとか、今後も篠山とかだけでなく、農村で柿が問題になっておりますから、それを考える機会となってもらえたらなと思っております。是非ご賞味ください。



※フォーラム開催後の懇親会について

フォーラム開催後、学生同士の交流を深めるため、懇親会を開催しました。情報共有やワークショップでの議論の続きが賑やかに交わされており、今後の活動に繋がる一日の素晴らしい締めくくりとなりました。

日 時：平成26年12月13日（土）18:00～

場 所：古市場公民館